

学力向上への組織的な取組の手がかりについて

奈良教育大学 小柳和喜雄

1. 学力向上で成功しつつある学校の三つの取組の特長（共通点）

学力向上の取組は、学校の環境によって着手する点や強調点、アプローチが多様である。そのような取組の中でも、実際に、成果を上げつつあるところでは、以下のような共通点が見られる（図1参照）。

まず、一つ目は、子どもにやる気（学ぶ意欲）をもたせる試みである。通常、子どもに学ぶ意欲を与える試みをする場合には、授業の導入を面白くしたり、教材を工夫したり、ゲームタッチにする試みが見られる（Attention:おもしろそう：入り口やプロセスの面白さ）。しかし、実際に、成果をあげつつある学校では、むしろ、達成感（Satisfaction: やってよかった：修了時の満足感、次への期待の面白さ）を子どもに味わわせる取組が特長的である。その他、この課題や問題は、「自分の将来に役立ちそう、生活に役立ちそう、前に学んだことや今度学ぶことと関連していて考えやすい」など、時間の前後関連性、横の広がりに関連性（Relevance: 理解しがいがありそう）など、子どもに取組む課題や問題の意味や値打ちが感じられる仕掛けをした取組、また、これなら考えられそう（Confidence: できそう）といった、少し手を伸ばして、教員や友達、教材や活動の手助けがあれば解決できそうな取組、子どもの自信につながりそうな取組を工夫していることが分かる。

このように取組の成果をあげつつある学校では、学ぶ意欲にかかわっても様々な取組を組み合わせで行っている。他の学校でも当然行われていると思われるが、成果をあげつつある学校はこのような学ぶ意欲への取組を、例えば上記四つの点から意識化でき（言葉はどうか、取組の強調点が説明できる）、目的や状況に応じて強調点を切り替えていく計

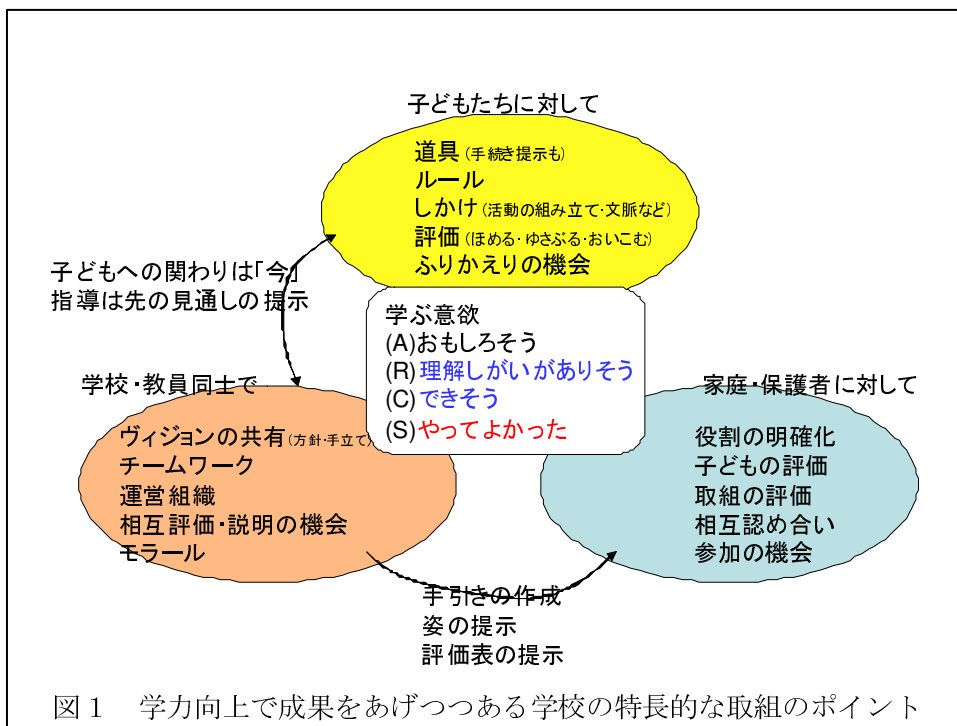


図1 学力向上で成果をあげつつある学校の特長的な取組のポイント

画的で組織的な取組（個人だけでなく学校として）がなされているところにその強さがある。

次に二つ目として、成果をあげつつある学校は、「子どもたちに対して」「学校・教員同

士で」「家庭・保護者に対して」にそれぞれ何を期待し、何を最低限の役割として果たしていくのか、そのためには、どのような仕掛けや道具があるかなどを、考えて取り組んでいるところにその特長がある。学力向上にかかわって、色々を行っているがこれで果たしているのか不安だという学校、また成果がなかなかでない悩んでいる学校は、成果をあげつつある学校が実際どのように取り組んでいるかを、上記三つに分けて学び、その相互の効果的な関連性を学び取っていくことが生産的であると思われる。言い換えるならば、成功している学校の取組を丸ごと学ぶのではなく、まず三つに分けてどのような取組をそれぞれしているのか、相互に関連付けている取組や単独で進めている取組などを冷静な面で眺め、実際に自分の学校でなされていることと比較していくことが大切である。例えば、「子どもの学習支援に関して考える部署」、「職員の研修や方向性を考える部署」、「家庭学級支援などを考える部署」と三つの部署を設け、取り組んでいくということもありうるかもしれない。

最後に三つ目は、成果をあげつつある学校は、必ずと言っていいが、「成果の評価」と「取組の評価」を行っていることがその特長としてあげられる。

取組の出発点において、どのような状況であったのかをしっかりおさえ（忘れがちであるが成果をあげている学校はこれをしっかり行っている）、取組を開始し、それによってどのような変化や成果が生じてきているか（成果の評価）、うまくいっているところと、うまくいかないところは何か違うのか、それはどのような取組とかかわっているか（取組の評価）を、必ず職員で共有できるように視覚化したり（学校によっては、子どもや家庭もその結果が共有できるようにしている）、検討の時間を必ず確保したりしている点が見られる。

2. 参加5校の取組から学ぶ

続いて、本事業に参加されている5校の取組から、学力向上への取組として学べる点を整理してみたい。五つの学校は、それぞれ規模も環境も校種も違う。また取組の背景にあるものや、苦労や努力の中で見出してきている細かな取組を考えると、とても簡単に述べることはできない。しかし個別事例の中にある取組の共通点や、自分の学校に近い点を示唆として受け止めていく本事業の普及という目的のためには、ある程度の抽象化も必要と考えた。そこで、ここでは失礼もあると思うが、簡略化して5校の取組の特長をその強調点から整理してみる。

次ページの図2は、本報告の中に掲載されている参加5校の取組を、その強調点の違いからマッピング（位置付け）したものである。特長を明らかにするとともに、学力向上の取組の全体を俯瞰し、他の学校にとって、身近に感じられるきっかけ（似ていてまず自分の学校が学ぶ取組として認識できる）を提示できること目的としている。

まず大正小学校は、「学習したことがなかなか定着しにくい傾向にある。それは、家庭学習の習慣が身に付いていないことや基本的な生活習慣が確立していないことなどが原因となっている」という分析から入り、朝学習や家庭学習支援などにまず焦点化して取り組んでいる。そのため「生活面の自律・自立」（それを支える生活習慣）の指導から入り（太い矢印はその意味）、学習面の自信につなげようとしている取組として位置付けさせていただいた。そこに朝学習、読書指導、学校の組織的な取組を通して学習習慣を身に付けさせようとしたり、家庭学習支援のための取組を行ったりしている。また授業研究など「分かる授

業」の研鑽に向けて教員による学校組織の取組をしていることを矢印で示した。

次に平群西小学校は、基本的な生活習慣と学習習慣の徹底を軸に取組を開始し、「教室に入って学ぶ楽しさ、今までに知らなかったことが分かる喜び」など「学習面の自信」にかかわっても意識的な指導をされているため、双方から矢印が出る位置に置かせてもらった。また家庭学習支援にかかわっても「手引きの作成」など、かなり道具立てについてもしっかりと行っているため、それを矢印と言葉で表現させてもらった。

一方、掖上小学校は、昨年度積極的に取り組んできた「基礎学力の向上」の効果的な取組を継続させ、さらに「自ら考え、問題を解決しようとする子の育成」を目指して授業づくりを挑んでいる点が特長である。それに向けて「教員の指導力を高める取組」「基礎・基本の定着を図る取組」「家庭学習を充実させるための取組」の三つを旗頭にして取り組んでいる。そのため、「学習面の自信」「学習の仕方」の指導を今年度は重視し、学校組織で取り組もうとしている。また「生活記録」を作成し、昨年度からどのように児童が変わってきているかも家庭へ丁寧に伝えられるようにしている取組のため、図の位置におき矢印を配置した。

また、曽爾中学校は、学習活動を効果的に進め、子どもに自信をもたせるために、時間割の工夫や、放課後学習、合宿（達成感、一体感）など様々な取組を通じて、生徒に「自分の学習のスタイルの確立」や「学習の仕方」を経験（マインドマップ他も）させ、導こうとしている。また大学などとも連携して、将来の見通しやキャリアなども考えさせようとしている点が特徴的であるため、図の位置に置き、矢印を示した。

最後に、御所中学校は、「学習意欲の喚起と基礎学力の定着」、「規範意識と学習規律」を中心課題として設定し、生徒自らが将来への展望をもてる学力の定着を目指す取組に焦点化している。意欲の喚起にかかわっては、「生活面の自律・自立」「規範意識と学習意識」

をもたせる積極的な取組（それを通じて学習への集中を高め、達成感を味わわせる）と進路の見通しをもたせる取組（学習の見通しを子どもや保護者にも明確に伝えていくシラバスの作成や個人の課題

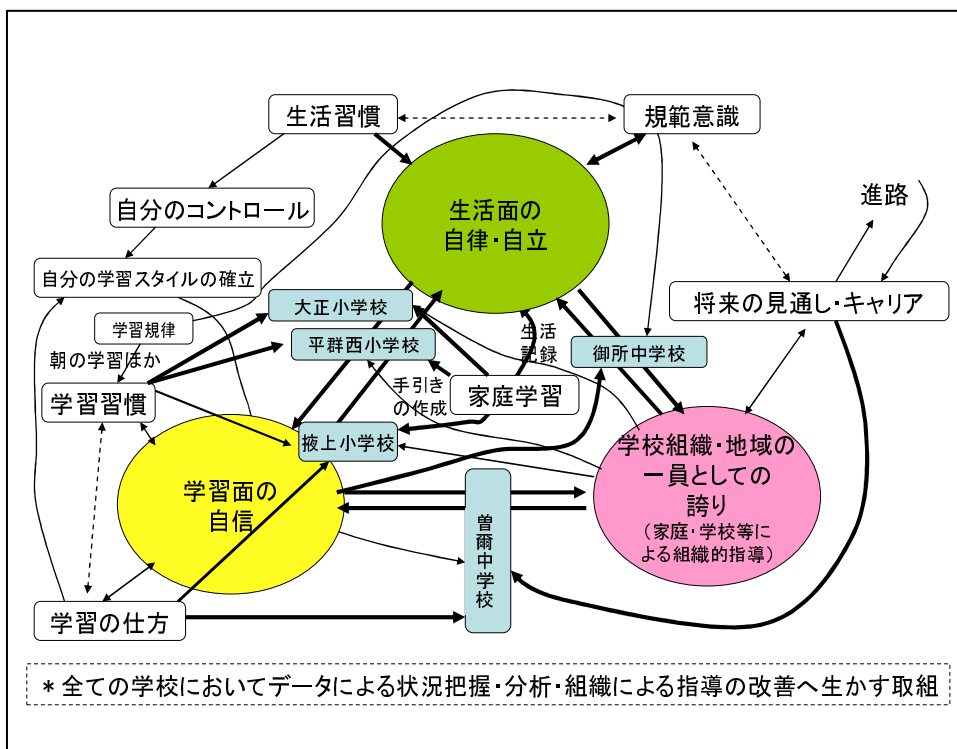


図2 参加5校の取組の特長

への対応) など行い、学校で組織的に取り組んでいる。そのため、図の位置に置かせてもらい矢印を引かせていただいた。

これらの位置付けは、学校の実績の特長を考える概略ポイントを示すものであるが、その特長が把握でき、次に自分の学校が取り組む方向性が俯瞰図全体（他校の実績の位置も含めて）から、いくらかでも予想が出来る点で、効果があると考えられる。

3. 学力向上へ組織で取り組む出発点として

これまで成果をあげつつある学校の実績、実際に本事業に参加している5校の実績などを通じて、学力向上への組織的な実績について考えてきた。

ここでは最後に、新たに学力向上へ学校組織として取り組む学校に対して、そのきっかけとなることを考えてみたい。図3は、学校組織で取り組む際の見通し（自分の学校の現時点を確認し、そこでの実績の強調点を見るときともに、その先にある実績を見通す）モデルを示したものである（成功した学校の実績の経過について共通項を抽出してモデル化したもの）。各学校は、学力向上に取り組む際に、まず自分の学校はどの位置か、どこから着手するかを考え、職員間で実績の合意とデザインをすることが重要となる。職員間に見通しがもてることからスタートになるからである。

当然のことではあるが、どこでも普遍的に通じる方法があるわけではない。しかしながら、似た環境や状況である学校が何をしているかは参考になる。その点、簡略化したモデルではあるが、実績のきっかけ、学校組織で話し合うたたき台になれば幸いである。

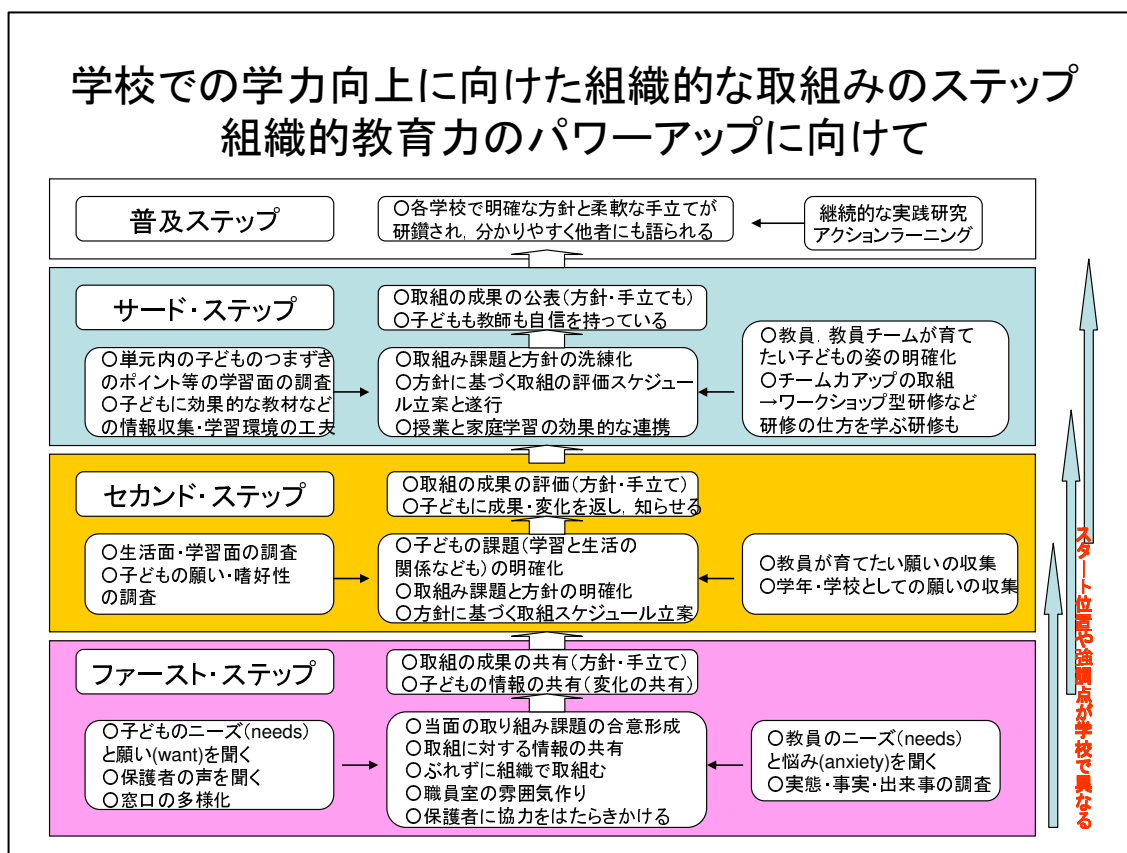


図3 学力向上に成功した学校の発展ステップモデル